

研究 報告

愛知県におけるミナミアオカメムシの発生経過と現状

愛知県農業総合試験場 いしかわ ひろし こいで てつや
石川 博司・小出 哲哉

はじめに

ミナミアオカメムシ *Nezara viridula* (以下、ミナミアオ、図-1) は亜熱帯から温帯に生息する世界的にも著名な害虫である。多食性で加害植物は野菜・果樹・作物等 32 科 145 種以上が記録されている (桐谷・法橋, 1970)。特に、イネでは穂を吸汁し (図-2)、斑点米を発生させ、ダイズでは子実を吸汁し、着莢数の減少、板莢、変形粒や変色粒 (図-3) の増加をもたらす等、多くの被害報告がされている (中村ら, 2009)。

ミナミアオは、本来南方系の昆虫であるため、1960 年までの日本における分布は沖縄県、九州南部、四国南部、和歌山県に限られていた (桐谷・法橋, 1970)。しかし、その後、分布が拡大し、現在では、近畿、東海地方をはじめ、千葉県、神奈川県、東京都など関東地方でも本種が確認されている (水谷, 2013; 東京都病害虫防除所, 2016)。今後、地球温暖化の進行によりミナミアオの分布拡大が懸念されるなか、ミナミアオの防除対策の参考のために、愛知県におけるこれまでの発生状況などについて紹介する。

I 発生経過

愛知県では、ミナミアオは 2008 年に初めて県南東部に位置する東三河地域で生息が確認され (愛知県, 2008)、同年 12 月下旬には西三河地域のダイズでミナミアオの加害により被害面積 37 ha、減収量 27 t の甚大な被害が発生した。これを受け、2009 年に全市町村のおよそ 100 箇所でのミナミアオの生息状況を調査し、30 市町村で発生を確認した (小出ら, 2010; 図-4)。このように急速に分布域が拡大し、2017 年現在では山間部を除いた広い範囲で発生が確認されている。ミナミアオは南方系の昆虫で、最寒月の平均気温 5℃ 以下のところでは個体群を持続的に維持できないとされている (湯川・桐谷, 2008)。そこで、愛知県における最寒月 (1 月) の平均気温を調べたところ、1980~85 年の 6 年間の平均気温では 5℃ 以上のエリアは存在しなかったが、ミナミアオが初確認される 4 年前の 2004 年から、県内で急速に分布域が拡大した 2009 年までの 6 年間の 1 月の平均気温では、愛知県の南半分が 5℃ 以上のエリアに拡大していた (図-4)。特に 2007 年は山間部の稲武を除いたすべての地点において 1 月の平均気温が 5 度を上回る暖冬となり、温暖化とともにミナミアオの生息域が愛知県



図-1 ミナミアオカメムシの成虫



図-2 イネ穂を吸汁するミナミアオカメムシの幼虫

Occurrence and Present Situation of the Southern Green Stink bug, *Nezara viridula*, in Aichi Prefecture. By Hiroshi ISHIKAWA and Tetsuya KOIDE

(キーワード: ミナミアオカメムシ, 愛知県)